



白石かずこ

青春のハイエナたちへの手紙

三笠書房

白石かずこ 詩人。カナダ・ヴァンクーヴァーの生まれ。早稲田
大学芸術学科卒業。著書として、詩集『白石かずこ詩集』『聖なる
淫者の季節』『今晚は荒模様』『もうそれ以上おそくやってきてはい
けない』etc、その他エッセイ、短篇集に『愛たち、神たち、け
ものたち』『一セントの花びら』『恋びとよ、こんにちらは』etc。

青春のハイエナたちへの手紙

検印
省略

1970年12月30日

第1版刊行

¥490

著者
・白石かずこ

発行
者・竹内静江

発行
所・

三笠書房

〒162 / 東京都新宿区戸山町35番地 電話東
京203-7781(代表) 振替東京22096

©KAZUKO SHIRAIISHI, Printed in Japan, 1970

日本製版・宮田製本

落丁・乱丁はお取替えします

0070-001020-8936

白石かずこ

青春のハイエナたちへの手紙

三笠書房

青春のハイエナたちへの手紙

ハイエナ

わたしたちは ハイエナなのだ

この人生の草原に

敏捷に 狡猾に 貪欲に 出沒する

ハイエナたちなのだ

わたしたちの名は

ナセルでも ライオンでも 英雄^{ヌル}でもない

きみたちは 名前のない この

貪欲な胃袋をもつ 草原の
いきのいい やくざな 若者たちを
知らないだろう

だが まちがいなく
餌にありつき

それをうばい たらふく食い
けっこう

やっていってゐるんだ

旅行者よ 彼らを 単に

掃除屋だとか チンピラと思っちゃいけない

スクリーンにうつってゐるのは

ライオンだけだが 実さい

やってゐるのは 彼らの方なのだから

目次

ハイエナ 4

青春のハイエナたちは 11

つかのま人と流浪 13

性の夜明け 21

眠りと目ざめの間で獅子は 26

青春は unhappy だ 32

親愛なる死 36

青春には観客席がない 46

フリー・セクスとロミオ 55

人生の長距離ランナー 64

人生というハプニング 73

出逢いというハプニング 75

風景と恋人 84

人生の荷物について 92

別れ 99

愛とはなんですか 107

愛することとアイ・ミス・ユー (I miss you) 116

快樂の哲人 119

生きる美味しさ 125

生きる美味しさ 127

マイ・ワイセツ考 142

服とのつきあい 155

読書・わずかな本との深い関係 162

そっけないこと 168

ゴーゴー流家元 171

ふるさととよそのもの 175

永遠までの眺め 179

孤独 181

不幸は悪徳である 201

幸福ぎらいと幸福のサイズ 204

カンタンなこと 218

ひとつの道とぜんぶ 220

ホモと芸術 232

人間の永遠について 249

装幀 武笠 昇

青春のハイエナたちは

つかのま^{びと}人と流浪

ゴーゴーの踊りも、モンキーからサーフィン、ソールフルストライクからパプコーン、フライドチキンと型が変わるみたいに、ひとつの遊びのたまりに現われる人もまもなく、顔ぶれがかわってしまう。

新宿にある昔はジャズをきく店だった「チェック」は、今、R & Bをききながら踊る若者たちのたまり場に変わった。

店は、相変わらず同じところにあるが、くる若者たちは、ある周期をおいてかわるのだ。

何年も、三年以上つづけてくる客となると、少ない。

「チェック」にかぎらず、若者たちのたまり場の店は、夏ものから秋冬のファッションに、いちはやく店頭を変える服の店と、同じくらい、現金に、冷ややかに、出入りする人間がかわっていく。

ここに前によくやってきた連中は、どこにいったのだろう。

いったい、今は、何者になっているのだろう。どこで、どんな暮しをしているのか。今はカタギに、（このコトバはおかしいが、無職の学生やフーテンから、サラリーマンになったり、家庭で、親の手伝いなどするようになれば、カタギのことである。）やってるのかしら。

人生のある瞬間だけ現われて、そこで渦をまいて、笑ったり、泣いたり、叫んだり、狂ったりして、まもなく正気にかえっていくか、亡びるか、とにかくいなくなる。

これらの人を、わたしは、つかのま人と呼ぶ。つかのましか、その祭りに、現れないからだ。

つかのま人たちは、わたしの出逢ったときそれぞれに、心の一カ所に狂気のタイムツをもやしていた。

そのタイムツの明るさのために、彼らが、あれほど、かなしく、哀れで、せつなく

で、ヴィヴィッドにみえたのかもしれない。

ひどく、生きてる風情が、みすばらしく、豊かだったのである。

学生にしろ、ゴーゴー・ガールにしろ、家出して手相見をアルバイトにしている女の子にしろ、学校があきて踊って遊んでるうちにお金がなくなり、男に尻を売ることをおぼえて、男と遊ぶ方が女というより楽しくなりはじめた男、また、イブ・サンローランにあこがれて洋裁をはじめたのに、前金もらったまま遊びに使っては、できあがらぬ服をかかえてたえず後悔している陽気な後悔男、くずといえばくずで、とりえがあるといえばとりえがある、金にはだらしがないけれども料理はこの料理店よりも上手とか、目がきくので、田舎にいつて骨董品を捨て値でみつてきては高く売ってつけてクラシをたてるとか、そんな風に、どことなくフラフラとたよりないにしろ、何かしら魅力のある若者たちが、これらつかのま^{ひと}人たちの中に、いるのだった。

ひとりひとりのつかのま^{ひと}人は、ひとりひとりちがう生い立ちをして、偶然、踊りの輪に集まって知りあったのだ。

この人たちのことを世間では、フーテンともいった。ヒッピーなどといったがる人もいた。フーテンでもヒッピーでもないつかのま^{ひと}人が、大部分だった。